
地上の織姫と彦星

ukaze

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地上の織姫と彦星

【Zコード】

N4367M

【作者名】

ukaze

【あらすじ】

七夕の夜、一人の少女の話

今日は七夕だ。

空を見上げる予定は今のところ、ない。

天気も空を見るには都合が悪いらしい。

そんなことを部室で考えている。部室には私以外に誰もいない。部員は私だけではないので、私しか部室に到達していないだけのことなんだけど。今日も早く帰るつかなと思う。誰か部室の来るとしても帰りづらい。

外では運動部の掛け声、同じ校舎内では、合唱部や吹奏楽部の透き通った音色が聞こえてくる。それに比べて私は何をしているんだろ。きっと私は何かをしようとして手遅れになるタイプだと思う。カバンに荷物をまとめて部室を出ようとすると。でも、それは私の行動を見計らつたとしか思えない同級生の入室で妨げられる。

「何、おまえまた先帰るの？」

「ああ、ここで帰らなかつたら今日は部活動参加だなあ。

「帰るよ。またね」

あまり会話するといけない。反論できなくなれば参加は決まったようなものだ。

「ちよつ、待てよおまえ先輩いつも困つてんだぞ。少しさうこうとも考える」

「考てるよ。考えた上で行動。じゃ私行くから」

セリフからして私は嫌なやつだな。こんなだから多分、友達いないんだと思う。近づいてドアの前に立つてると邪魔だよオーラをして退いてもらつ。退室してドアを閉める。そして駆け出す。玄関まで。まるで何かから逃げるように。

家に着いたのは7時過ぎで夕飯は既に用意されていた。この時季

になると7時過ぎてもそこそこ明るい。夕飯とお風呂を済ませて8時半くらいには自室にこもる。食事中に見た天気予報では夜にかけて少しづつ晴れていくようだが星が見られるかどうかは怪しいところらしい。

窓から顔を出し外を見上げてみる。パソコンの効いた自室とは少し違った冷涼感と少し雲の間に見え隠れする星が夏の到来を感じさせた。星やっぱり見てるじゃん、と自分に突っ込む。見上げても夏の大三角は雲に隠されているのか、自分の見上げるほうには無いのか見つけることはできない。もう、寝ようかなと女子高生にしては早い就寝を考える。窓を閉め、外の世界をシャットアウトする。パーテンも閉め、就寝準備とする。

電気を豆電球にまで消して布団にもぐる。おやすみとひとりでつぶやき目を閉じた。

電話が掛かってきたと気がついたのは、偶然以外の何ものでもないだろう。いつもなら気がつかずに寝続けている。就寝時間の問題かな？ 寝ぼけた目でケータイを机からベッドに持ち込み表示を見ずに電話に出た。

「もしもし、誰ですかこんな時間に」

不満げに答える。結構眠いので語尾に行くにつれて発言がとけていくようなしゃべり方になってしまっている。

『何、寝てたの？ ハハツ、今日はすいぶん早いね』

通話相手が誰かは声で判断した。途端に全身に緊張が走る。女子高生は一人や一人気になる子がいるのです。冷たいケータイを握っているはずの手が少し汗ばみ意識しないとケータイを落としそうだった。

「今日は眠たかったんだ。で、どうしたの？」

平静を装つて返す。動搖を隠せたかどうかわからないけど、なるべく自然に。落ち着けばできると心の中で念じながら、相手の返答を待つ。

『無理ならいいんだけどね。今から星、見に行かない?』

「二人ですかっ!？」

のわつ! 反射的に訊いてしまった。すうい、眠気なんていつの間にやら消えている。どうも、こうも、平常心を保てない。恋愛とはこういうものですか。

対して相手はこちらの惨事を知るよしもなく通常通りのペースで返してくれる。

『一人がいいならそれでもいいけど、一応何人か誘つてみる予定』
一人でもいいんだ! それなら一人がいいです、といいたいところだけれど言つてみようかな。やらずに後悔するよりもやつて後悔したほうがましかな? それで傷をつくることになるかもしない。それでも、今日を逃せば次は無いだらう。私は何かをしようとすれば手遅れになるだらうから。

「えと、あの……私以外にもう誰か誘つてる?」

うう、私の意氣地なし。確かめなきやならないことだけど、これじゃないでしょ。

『ううん、君が一番最初だよ。あいうえお順で一番最初でしょ』
なるほど、あいうえお順か。一番最初つて聞いた時、思わず顔が二コニコしちやつたけど他意はないんだね。少しがつかり。しかし、ここからだ。一人でどうですかって聞いてみるんだ。ちょっと、深呼吸。すつて、はいて。

「あの……その、さつき一人でもいいって言つたよ、ね?」
緊張の末、声は震えていたし、しゃべり方もぎこちない。でも、切り出せた。よし。

『ん? そうだけど、どしたの? こんな僕との一人がいいの?』
そんなあなたとの一人がいいんです、なんていえないけど。

「う、うん、ダメ……かな?」

言つたあああああ~! うう、すごい緊張する。心臓の鼓動が大げさに聞こえる。エアコンが効いているはずなのに体が熱い。顔も火照り、ケータイをもつていられないほどの手で頬をなでる。汗が流

れでいるような感覚と急激に冷えていくような感覚。二つの間にかベッドの前で立ち上がっていた。

『いや、いいんだけど。何故に僕と一人がいいの？ 僕つていいとこないでしょ』

『いいの？ やッ……』

また、反射的に言葉が！ やつた、と言いつこうになつて口をつぐむ。危ない危ない。やつたああ～今度は心中で存分に叫ぶ。少し落ち着いてきたけれど、心臓の鼓動は徐々に早くなつてきている。

『？まあ、いいや君と二人なら僕も嬉しいよ』

うわあ、そんなこと言わると今すぐ死んでもいいかもって思える。私に明日はあるのか！？ ケツと今、私は満面の笑みを浮かべていることだらう。

「いつから行きますか？」

そう言って、カーテンをめぐり空を見た。その時、一番驚いたのは天気予報に嘘を吐かれたことだつた。私の心と反比例するように外は雨。小雨レベルではなかつた。水溜りレベル。雲は空を覆い隠していた。「うそお……」と言葉をもらす。

『どうしたの？』

今のが聞こえたらしい。といつかあつちは気づいていないのか、天気に。どうしよう。私の心が次第に曇つていくを感じた。

「外、雨降つてる。どうする？」

少し間をおいて外を確認したんだと思われる声が『あつ、ホントだ。晴れるって言ってたのにな』と聞こえ、『ゴメン。誘つとして天気も確認してなくて。ホント『ゴメン』と返してきた。

私は「全然いいよ。誘つてくれてありがと」を返すのが精一杯だった。

『ホント悪いね。『ゴメン時間とらせて。もういいよ切っちゃつて』

そう簡単に切りたくない。こんな機会滅多に無いんだから。次はあるのかな、そう考えるともう手遅れになりそうな気がして、自分の心が声に出で電話の向こうの相手に伝わっていた。

今年も、夏の大三角を見ることは無かつた。彦星と織姫は私の空ではつながらなかつた。でも、地上でつながつた、星と星の間なんて比較にならないぐらい近い電話越しに。手遅れになる前に今度はうまくできたみたいだ。

あれから、部活にそこそこ真面目に出るよつになつた。帰り道、彼と一緒に帰るためだ。

彼は「来年こそ、一人で星、見ような」って言つていた。私は「うん」と一言だけで返した。

来年の7月7日は晴れますよつにと願いをこめて。

(後書き)

田を通してくださつてありがとうございます。
最後ひへんがぐちやぐちやになるのが僕の弱点です。
あと、僕はこれくらいの文章量が書きやすいようです。3000字
くらい。

これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4367m/>

地上の織姫と彦星

2010年10月8日14時25分発行